

小学校はいつも隣にあります

5月28日(金)、年長組の子どもたちが、先生と一緒に小学校の周りを一周する探検に出かけました。

校庭にいらっしゃった教頭先生が、「どこでも自由に見ていいよ。」と優しく声をかけてくださいます。外で作業をしていらっしゃった技能主事さんも「おはようございます。」と挨拶をしてくださったそうです。子どもたちは、先生と一緒に校庭をぐるっと回って、体育館のわきを通して校舎の北側も見て、最後に小学校の昇降口でみんな揃って写真を撮って帰ってきました。

帰ってきた子どもたちに、「みんな、小学生みたいだね。」と声をかけると、ニコニコしながら「もう少し(先)だけだね。」と胸を張って答えてくれました。

コロナ禍の中、小学生と実際に話したりかかわったりする「交流」はなかなかできません。ですが、小学校はいつも隣にあります。子どもたちは毎日小学校の校舎を見て過ごしています。小学生が校庭で体育の授業をしたり、昼休みに遊んだりする様子を、毎日、見えています。そういう環境の中で生活している子どもたちは、小学校をととても身近なものとして感じるようになっていきます。そうして入学を心待ちにするようになっていくと思うのです。



「シャボン玉、いってらっしゃい。」

6月3日(木)、空が真っ青に晴れ渡ったさわやかな朝です。年少組の子どもたちが外でシャボン玉を作って遊んでいます。うちの骨に石鹼水をつけて、それを仰ぐと一度にたくさんのシャボン玉ができます。風が吹いてきてシャボン玉が飛ばされます。追いかけてみますが、つかまりません。子どもたちは大喜びです。



また、端っこの方では、女の子がひとりでシャボン玉をつくっています。壊れないようにそっとストローに息を吹きこんでいます。まん丸なシャボン玉ができました。風に乗って高く上がっていくシャボン玉に向かって、「いってらっしゃい。」「どんぐりの木のとっぺんまで、いってらっしゃい。」と声をかけています。シャボン玉にさえも心をよせる優しい子どもたちです。

こういう遊びを通して、子どもたちは目に見えない風の動きや水と石鹼水の違いなどに気付いていきます。そうして「なぜだろう？」と考えるようになっていきます。